

「まあ、きれい。みごとねえ。ご覧になって。山口さん。」「ワァ、ホントですねエ。」花曇の空の下、淡い紅色の花がまるで降り積もった雪のように学内をおおう頃、武田先生と私は北二号館へ向かう道すがら並んで歩きながら、幾度このような会話を繰り返したでしょう。思えば、ご退官されるまでの六年間、ほんとうにお世話になりました。思い出を数えたら両手では足りないほど一杯あるのですが、やはり心に残るのはあのピンと張り詰めた緊張感のある授業風景だったように思います。

西二号館の大きなガラス窓から見える鮮やかな緑、陽炎立つ夏の日、冷たいジュースを片手に薄着の学生たちの弾むような笑い声。スルスルとドアを開け、すこし恥ずかしそうに先生が入っていらっしやると、一瞬にして静けさが広がり、だれもが一斉に前を向き背筋をシャンと伸ばし、筆記用具を手に授業の始まりを待つのです。上質の布地で見事に仕立てられた品の良いスーツに柔らかな風合いの桜色のブラウスをお召しになられた先生は、暑い外気の中を歩いていらしたとは思えぬほど超然として、「こんにちは。お暑いですわね。」とご挨拶されると静々として席につかれ、エンジ色のケースから金色の細い蔓の付いたメガネを取り出し「それではっ」と始められます。すると、色白で華奢な先生からは想像もつかないようなハリのあるお声が室内に響き渡り、生徒たちはその一言一句を聞き漏らすまいと必死になってペンを走らせるのでした。そして講義後の教室は、書き逃した箇所の確認で再度活気に包まれ、出来の悪い私などは毎回のよう質問に出かけたものでした。そんなとき、先生は再びあの可憐なお声に戻られ笑顔で教えてくださいました。

考えてみれば、私ほど先生のお手を煩わせた学生はいなかったのではないかと思います。大学入学時にはすでに結婚していた私は、公私にわたる様々な問題に直面しては何度も挫折しそうになり、その都度「しっかりなさい！」と叱咤激励されたものです。また、レポートに記されたアドバイスをみる度に、先生の豊かな学識と卓越した英語力に敬服し、日本語の美しさや正しい言葉遣いについても勉強させていただきました。元来、怠け者で弱虫の私がここまで頑張り続けることができたのは、ひとえに先生の細やかなご指導とご助力があったからです。そして、ご多忙を極める日々にもかかわらず、朝方まで研究や授業の準備に力を注がれていた先生のお姿は、私にプロフェッショナルリズムとは何かということを教えてくださいました。

このような武田先生だからこそ、満開の桜を背景にたたずむご様子は、楚々として美しく、凜として潔く、花のように優雅でいらっしやっただと思います。学習院に学び長きにわたって母校に尽くされた先生は、まさに我が校の校章、桜の花のような方でした。ご健康に留意され今後とも益々活躍されることをお祈りし改めて心より感謝申し上げます。